

航空隊整備兵として

愛媛県 丹 栄

私は大正十（一九二一）年三月六日、丹家の三男として生れ、兄と姉弟の四人兄弟でした。生家の家業は、父と兄が酢の醸造業を営んでおりましたので、私はその出来た製品を商店に配達する仕事をしておりました。

昭和十六（一九四一）年の正月を迎え、家族そろって神社へ初詣に行きますと、何人かの人が「祝出征」のタスキを掛けて神社詣りする姿が見られました。支那事変も戦線が拡大され世間の戦時色は一段と濃くなって来たのでした。

隊の通知が届き、十二月十日宮崎県の飛行第七連隊に入隊が決定されたのでした。

兄も召集され、今度は自分が入隊ということで行くという事になり、今年も暮れようとする十二月十日、飛行連隊の営門を入りました。初めての軍隊生活、それは思いもよらなかった厳しいものでした。

航空隊と言っても、三カ月間は歩兵の一般教育と共に、航空機についての精密教育、更には整備教育等の厳しい毎日の訓練でした。また内務班のしごきの厳しさは並大抵のものではありませんでした。ピンタは初日から始まり、平手やゲンコツはまだしも、皮のスリッパそして帯革、軍靴等で殴打され、顔面は変形するすさまじさです。およそ内務班教育の範疇を超越した仕事です。また古参兵は、その日々の気分次第で初年兵に対する扱いの内容も変わってきました。このような扱いの教育は一般社会では到底考えられなかったことで

国民学校を卒業すると、松山の商業学校に入学したのですが、二年生の九月頃、一家の大黒柱であった兄にも召集令状が来て朝鮮の部隊に入隊することとなり、家業の酢の製造の仕事も父一人では容易でなくなり、やむなく私は商業学校を中退しなければならなくなりました。そして学校をやめ、父の酢の製造業と出来た製品を小売店へ自転車で配達する仕事をしておりました。

九月十日、私も壮丁検査となり、しかも甲種合格で兵科は陸軍航空兵と言われたのです。航空兵とは夢にも思っておりませんでしたので、一瞬心配の感がよぎったのでした。

戦況は中国大陸から次第に拡大し、ついに南方戦線へと転じていったのでした。十一月の末日入

す。

厳しい三カ月の初年兵教育も終了し、私は整備兵になり特別教育、実務訓練が始まったのでした。

この連隊は九七式戦闘機が配備されておりました。これは陸軍航空隊の最新鋭機と言われ「八五発動機九気筒複列一八〇〇馬力」の能力をもっていました。教官から教程の配布を受け、三週間ぐらい整備訓練をしました。機の各部の解説、そして実技訓練には必至の思いで取り組んでいました。またこの飛行機には、各部に最新の技術が取り入れられているため、ベテランの古参の曹長でも時々頭を傾げる状態で、中でも油圧関係の作動不完全等は悩みの種でした。

本機は試作機を終えた直後の量産機でしたのでエンジンカバーや点検口のカバーの脱却などにも不具合があり、金属工作兵の支援を受けることも度々でした。この頃、当飛行機隊から同機種の子機ほどの戦隊が南方へ出撃して行ったのでした。

連日の猛訓練後に焼けたエンジンの背に点検の手を伸ばすと、腕も度々火傷することがありました。それでも点検は止める訳にはいきません。一系統を完全に整備完了するまでは死にもぐらいいました。ネジ一本のゆるみも故障の原因となり、しかも速やかに整備しなければならぬので、一分一秒ともおろそかにできず、まさに整備作業は時間との闘いでもあったのです。

整備を任務とする我々には、飛行訓練内容は詳しくは分からなかったのですが、当日の訓練に伴う準備、伝達などによって操縦訓練が以前とは大幅に短縮され、明らかに特攻攻撃の専門訓練に重点が置かれてきたことが明白になって来ました。

昭和十九年八月になると米軍のB 29編隊が、本土爆撃を敢行し、軍需施設や工場等を目標に来襲して来たのでした。

敵機来襲の通報が入ると、急いで燃料オイル、機関砲弾丸等の挿入点検を済ませ迎撃に備えたのでした。すでに名古屋地方の軍施設や工場を目標

必ず来襲するものと覚悟はしていたのですが現実となったのです。友軍機は戦闘機三十機、直ちに迎撃に飛び立ちました。敵機の数は十二機、連隊上空に飛来して来たかと思うと爆弾の雨を投下したのです。

兵舎と格納庫は吹き飛んで火災が起きどうすることも出来ません。攻撃に転じた友軍機は残念にも二機ほど敵機銃弾を受け墜落してしまいました。一人は運よく落下傘が開いて降下することが出来たのですが負傷しているようでした。

B 29は手強く、悠々と飛び去って行ったのです。この時は格納庫から飛び出して兵舎の裏側にいたのですが爆風で吹き飛ばされ、それに右足を破片でやられて動けなくなり、蹠すくまっていました。敵機は予定の攻撃を終え飛び去って行ったので、私は無事だった戦友に助けられて病院に運ばれたのでした。

後で分かったのですが、この時の空襲で三人ほどの戦死者があったと聞き、自分も良くも助かつ

にB 29爆撃機の来襲は目ごとに多くなり、二月初め頃よりは連日迎撃に飛び立ったのです。

迎撃から帰隊した友軍機にはいづれも弾痕が生々しく、数個所の被弾は当然のごとくで、時にはオイルタンクや燃料タンクが被弾しているのを見ると、よくもこのような姿で生還して来たものと、思わず声を掛けることも再三ありました。

出撃は二、三機ごとの編隊で行き、やがて生還して次々に着陸するのですが、自分が整備した機が帰って来ない時は心配で、それが被弾したのかエンジン不調のためなのかと僚機の操縦士の戦果報告に耳をそば立て聞き入るのでした。

十月二十五日には、B 29五十六機が長崎佐世保の大村海軍航空廠を、十一月十一日にはB 29二十九機が長崎の大村海軍航空廠を来襲、爆撃されたのです。十一月十六日午前十一時三十分頃でした。私達は格納庫で整備をしていると「空襲！」と報ぜられ、急いで外に出て見ますと東方の空に豆粒ぐらいの黒い敵機の姿が目に入りました。

たものぞと生死の運不運を感じたのでした。病院生活をして気が付いて見ますと昭和二十年も二月となっていました。

南方戦線では米軍の攻勢が盛んになり、玉砕する島々が続出してきました。それに制空権は完全に米軍のものとなり、いよいよ本土空襲も激しさを増して来たのです。入院している間、戦友のほとんどは南方に向けて飛び立って行き、同じ整備兵の者達も同乗して行ったと言われました。

戦友のみんなが戦地に行ったのに自分だけが取り残され、はねのけられたような気持ちで本当に寂しい気持ちでした。退院したとはいえ、あの時の空襲で右足にはまだ破片が残っていて歩行に困難を来たしている状態だったので、戦地に行っても充分な働きは出来ないからかと、自分自身を情けなく思いました。

兵舎や格納庫は焼け、その跡片付けも完全に終わっていないので、自分達はその跡片付けの毎日でした。また空襲でやられた飛行機の補修整備等

をしておりましたが、各地の軍需工場等が爆撃で破壊されてしまったので、部品が無く困ってしまいました。自分の入院中、既に我が部隊にも帝都防衛の任務が課せられていたのです。

昭和二十年三月九日、富士山を目標に飛来したB 29の大編隊三百八十機は、富士山上空を迂回し、次々と帝都を爆撃し、爆弾焼夷弾の雨を降らせ、焼夷弾で帝都は火の海と化しました。帝都のほとんどが被害を受け、宮城や明治神宮も被災したとの情報に皆肩を落としたのです。

その後も関東地方の各都市も連日の空襲を繰り返して受けたのです。我が迎撃機もその都度出撃し、体当たり攻撃を敢行して大空の花と散っていきました。

いかに生命を賭して戦い、旺盛な大和魂の精神力と技術であっても、合理的な戦略と物量には勝てなかったのです。そして最後に止どめを刺されたのが八月六日の広島、八月九日の長崎に投下された原子爆弾でした。完全に連合軍の手中に落ち

た我が軍はなすすべもなく、八月十五日遂に、無条件降伏をし、大東亜の大戦も終止符を打たれたのでした。

敗戦のショックはありましたが、毎日昼夜を問わず空襲から解放され、生命の危険はなく、戦争の恐怖心は無くなりましたが、今後我々はどうなるのだと不安な気持ちでもありました。

入隊以来一度も外地勤務の経験がなく内地勤務ばかりでした。そして連日連夜の空襲でしたが、私は一命を取り止めることが出来ましたが、私が入院中に南方戦線に行った戦友は、後で分かったのですが、大部分の方が戦死されたとのことでした。

やがて部隊も解散となり、昭和二十年九月十日、懐かしの我が家へ帰りました。私の家は田舎町でしたので空襲もされず無事でした。

父も母も私の帰りを喜んで迎えてくれましたが、兄がまだ帰っていないと言うことでした。私には兄の部隊の消息は全く知らなかったのです。

学鷲特攻の飛行訓練

神奈川県 中丸敏夫

私は日本料理店を経営していた父・又一（昭和十一（一九三六）年死亡、母・モト平成四（一九九二）年死亡）の長男として生れました。兄弟は弟・昭彦、妹・茂子、弟・英一の三人で以上六人家族でした。

昭和十八年徴兵検査を受け甲種合格で海軍の調書を貰ったのですが、入営前に大学専門学校卒業及び卒業見込の者に対する新制度による陸軍特別操縦見習士官の募集が施行されたためにそちらを受験し、十月一日に宇都宮陸軍飛行学校へ入学しました。

入学当初から見習士官の階級を与えられ、地上訓練七日間のみで、十月八日からは早くも飛行訓練を実施されました。特別操縦見習士官第一期生で、学校は栃木県清原村にありました。

敗戦当時は物資不足ですが配給制度の生活だったので我が家の商売も以前のように出来ず、何とか細々ながら商売を続けている状態でした。

そして、昭和二十四年に兄がシベリア抑留から帰って来たのです。兄弟無事に郷里に帰ることの出来たことに両親は涙を流して喜びました。家業は兄が引き継いでやることになったので、私は現「東洋レーヨン工場」に入社しました。

戦後六十年、平和な世の中が続いた我が国は、平和な世界を恒久的に持続することを切望するものです。